

<登場人物>

隈研吾 KENGO KUMA

建築家 / 東京大学特別教授・名誉教授

1954年神奈川県生まれ。東京大学大学院修了後、コロンビア大学研究員を経て、1990年限研吾建築都市設計事務所を設立。主な作品に「森舞台 / 宮城県登米町伝統芸能伝承館」「那珂川町馬頭広重美術館」「アオーレ長岡」「プザンソン芸術文化センター」「V&A Dundee」「国立競技場」「UCCA 陶美術館」など。著書に「負ける建築」(岩波文庫)、「小さな建築」「自然な建築」「日本の建築」(以上、岩波新書)「建築家になりたい君へ」(河出書房新社)など。



<監督・撮影・編集・プロデューサー>

岡博大 HIROMOTO OKA

映画作家 / NPO 法人湘南遊映坐理事長

1971年神奈川県生まれ。慶應義塾大学卒業後、東京新聞記者を経てNPO 法人湘南遊映坐を設立。映画文化の草の根振興に取り組んでいる。著書に「映才教育時代」(フィルムアート社)、編著に「小津三味」(遊映坐文庫)など。大学時代の恩師である建築家・隈研吾氏の15年の歩みを追った自主制作のドキュメンタリー映画『粒子のダンス』(2025)が初監督作品。

<音楽>

藤本一馬 KAZUMA FUJIMOTO

ギタリスト・作曲家

1998年ヴォーカルのナガシマトモコとorange pekoeを結成。2002年1stアルバム「Organic Plastic Music」を発表。2011年からソロ活動も本格化し、インストゥルメンタルの活動にも取り組む。主なアルバムに「SUN DANCE」(2011)、「FLOW」(2016)など。

製作・配給宣伝 NPO法人湘南遊映坐

info@particledance.jp www.particledance.jp

製作 湘南遊映坐 岡博大 / 共同プロデューサー 渡邊傑 岡桃子 / 協力プロデューサー 寺澤剛 飯原雄介 小西順子 加藤颯
サウンドデザイン 勝本道哲 / 題字 古川タク / 宣伝美術 上月匠 / 予告篇 岡博大 板垣恵一

シアター・イメージフォーラムほか

2026.3.21 SAT 全国順次公開

まるで奇跡。

この映画は、隈研吾のプロモーションビデオではない。一個人の建築家はもはや触媒でしかないのに気づく。巨視化した大きな時間の捉え方がされている。時間と空間の越境、あらゆる局面でそれが行われているのだ。建物とそこに住まう、そこを利用する、そこを行き来する人々と暮らしと生活とを丸ごとひっくり返る。過去、現在、未来の視点から、人類の歴史と息遣いを描いた映画に他ならない。—— 瀬々敬久 (映画監督)

建築家 隈研吾

15年間の旅路を点描した叙事詩

粒子のダンス

KENGO KUMA / particle dance

Official Selection 2025

VIFF
Vancouver
International
Film Festival
Portraits

COPENHAGEN
ARCHITECTURE
BIENNIAL

OFFICIAL SELECTION 2026
BUDAPEST ARCHITECTURE
FILM DAYS

VICTORIA
FILM FESTIVAL
OFFICIAL SELECTION
2026

監督 岡博大

2025 / 145min. / 4K / 5.1ch / 1.78:1 / Color / Japan

製作 NPO法人湘南遊映坐



建築・映像・リズム。

誰かひとりをクローズアップするドキュメンタリーは数ある。その語りかたは意外にパターン化していてもいる。作品を提示し、対象となる人物が語る、をくりかえすような。この映画は、違う。映画としてみる。映像のリズムを感じればよい。画面にはしばしば家族が送る、ゆるやかな日常、おそらくは休日の様子が映しだされる。たまたま、かもしれないが、たぶんそうではない。生活とつながったところに建築物がある、という発想が描きだされている。

—— 小沼純一（音楽・文芸批評家）

夢のように愉しくてカッコイイ映画です。

小さな鞆をひょいと肩にかけて旅する隈さんがよく出てくる。そんな隈さんを追いかけているうちに、日本人とは何かということが伝わってくる。なんとひたむきで健気なんだろう。よく知っているはずの日本人のことなのに、その静かな明るさ、しなやかな強さが胸に迫り、気がつくとは私は泣いていた。隈さんはこれからも軽やかに世界中を飛び回り、被災地を救い、軽やかでしなやかな建築を残していくのだろう。

—— 中園ミホ（脚本家）

学生たちの姿に 小さな隈研吾たちを見るよう。

映画は2011年3月11日に起きた東日本大震災の被災地に立つ隈研吾の茫然とした無言の姿をカメラが長回してとらえるシーンから始まる。3・11以降の10年以上にわたる日本社会の変化の縮図に似た時の流れが息づいているかのようだ。鎌倉の地の竹を使って隈研究室の学生たちが小さな映画館を地元の人たちと一緒にワークショップのように作り上げる。建築がいかにその土地固有の自然環境と共振しながら歴史を作っていくかということが知れて面白い。

—— 村山匡一郎（映画評論家）

「中橋」は未来への希望の橋になった。

隈さんは「人が住まないところに賑わいを作るのは難しいんだよな」とポツリと言いました。その難しい課題を引き受けてくれました。隈さんは自分の個性を出すことよりも、その場所のあり方を優先する。「南三陸さん商店街」は、仮設時代のイメージを大切に木造で平屋の造りにしました。「南三陸311メモリアル」のオープニングセレモニーの時、商店街に「隈先生素敵な建物ありがとう」という、のぼり旗がたくさん並んでいました。あれこそが町民の素直な思いです。

—— 佐藤仁（元・南三陸町長）

宇宙は素粒子からできている。

全てを分解していった究極の存在である素粒子が宇宙の成り立ちを決めてきた。同じように国立競技場のような大きな建造物も、一つ一つの部分、粒子から成り立っている。温かさと安心を作り出す。この魔力は宇宙創生の物理法則につながっているのかもしれない。

—— 村山斉（素粒子物理学者）

<映画の概要>

建築家・隈研吾の15年間の歩みを記録したドキュメンタリー映画。大学時代の恩師である隈氏の英智を後世へ継承しようと、教え子である岡博大監督が自らカメラを手にして独学で自主制作。世界16カ国80以上の建築プロジェクトが登場する。東日本大震災「3.11」に伴う東北での復興プロジェクトをはじめ、東京2020大会、コロナ禍などの中で、絶えず新たな建築のあり方を問いかける隈氏の日常の旅姿や東京大学での建築教育の様子などを、俳句のような断片的映像をつむいで描いた連句的作品。



<特別協力> 隈研吾建築都市設計事務所の皆さん 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻隈研吾研究室の皆さん 湘南遊映坐の皆さん

<スペシャル サポーター> 地域シナジー研究会 ◆ 大林組 鹿島 大成建設 TAKENAKA サントリーホールディングス Jクリエイティブ デバイス フジタ 文化シャッター エスケー化研 オカムラ 桐山 佐藤秀 ジーシーデンタルプロダクツ 清水建設 大光電機 太陽工業 丹青社 戸田建設 乃村工務社 長谷川建設 不二サッシ 松井建設 マルガイ 矢田工業 山庄建設 三和シャッター工業 中島工務店 <サポーター> 荒木武 司葉子 岡光宣 岡保子 浅井健史 江尻憲泰 小川浩 伊藤妙恵 吉里光晴 サムライ家具 吉永一宏 摩尼秀法 末安諄典 長嶋建人 笠兼三 長田和弘 田中翔太 市村彰英 山本千晶 浅川泰宏 上原美子 小林直寛 北浦宏之 北浦博寛 井上浩城 小林希美 小林かずみ 高田和義 神田剛 中村剛 ALTANKHUYAG Zorigt 堀端典子 吉成めぐみ 那須誠 松本博幸 松本真理子 松本実久 跡部千慧 伊藤慧二 諏訪友美 箕口雅博 田上竜也 笹崎伸也 笹崎直子 辻口葵 岡晃大 小宮明子 藤澤譲二 たつみなつこ